

手取り足取りの全面援助は、相手の方の自立心を奪うから結果はかえって悪い。
依頼心は、人生最大の敵でもある。

以前にオフィスとしていたビルでは六十代後半と思われる方が、毎朝、掃除をしていた。
六時から二時間かけてビルの一階～七階の階段、トイレを掃除すると相当の運動量で、その人はまことに丈夫である。

「資格職業人」（自営業）は、長時間労働。月月火水木金金。
働かない限り1円の収入もない。
同じ収入を得るのに、サラリーマンの1.5倍働く。
「どうせ、起きている間は——何かをしているんだ……」
長時間労働は当たり前と考える。

「窮すれば変じ、変ずれば通ず」

もう既に体験されておられるだろうが、仕事の注文は看板などを見て入ってきた人によってもたらされるわけではない。友人、知人の人脈から「友人の友人の親類」などまでの縁ある間柄からもたらされるもの。つまり、友人づくり、人脈づくりは仕事の上に不可欠なのである。

だが、どの分野にせよ、自由業へ入った人は当初の一、二年間を「仕事がない苦しみ」のなかで過ごす。この事実を知りすぎているゆえに、筆者は**自由業の世界へ皆さんのすべてを迎える気がしないのだ。**

例えば自由業の収入は、どの分野にせよお客様、顧客からの仕事の依頼があり、その対価として得るものである。ところが、その仕事の注文が、コンサルタントにせよ税理士にせよフリーライターにせよ物書きにせよ、入職当初は期待できないわけだ。

これはなぜだろうか？ 依頼する側から見れば「どうせ頼むなら一流の人へ頼もう」という発想になるからだ。**どの分野にせよ、自由業の人はひしめいている。**その中で実力を備えている順に仕事が舞い込むことになる。これが厳しい現実である。

ある人が、ある自由業の世界へ入る。**最初の二、三年間はまったく仕事の注文がこない**ことも珍しくはない。注文がなくては収入がないから——入職者は次々とリタイアしていくことになる。「サラリーマンのほうが、どんなに安定しているか……」というセリフを残して

……。

こうして次々に引退していく人が出てくるから、我慢して残っている人には、次第に注文が増えてくる。そうして、一応の実力を備えた人なら**入職五年目で、生計を養うだけの収入が、からくも与えられる**ことになる。七年目から十年日に至ると、多少は安定してくるわけだ。むろん、その一人前になる期間までに病気をすると、とても苦しむことになる。むろん、病気の恐ろしさは万人にとって同じだとしても、サラリーマンならある期間、会社から給料が出る。ところが自由業は生活保護を受けぬ限りは、どこからも収入が与えられない。これもまた厳しい現実である。

私の場合、相談業を始めた三十歳のときからその道での収入を期待しなかった代わりに、「物書きによる収入」を考えた。書くことは下手だったが少年期から好きだったし、一応はマスコミ機関に身を置いていたから——なんとかなる、と考えていた。

だが事実はなんともならなかった。私はマスコミ界に友人や先輩が誰ひとりいなかった。それにまた私の狙う分野は小説ではなかったから、懸賞小説への応募もできなかった。どのようにして仕事の注文がもらえるか、まったく知らなかった。一年、二年と注文は何ひとつなかった。自分にマスコミ界での知人がなく、自分の側からのアピールもしないのだから、考えればこれは当然のことなのだ。

それで前述のように、実業之日本社に「ライターとして使って下さい」との依頼状を書いた。なにしろ、どの雑誌社にもこんな手紙は日に何通も舞い込む。一顧だにされなくて当たり前なのだ。だが、私は幸運だった。同社の編集長だった金子さんの好意で仕事を頂けたのだったから……。

さて、「自由職業人」にとって「**最初の第一節目（十年間）**」の間には、どのようなことが発生するのだろうか。これは端的に言って二つの事柄だ。「**経済的困窮**」と「**実力不足による仕事上の失敗**」が、それである。この二方面にからむ問題は、すべての「自由職業人」が遭遇すると予測されるテーマ。この二方面に関して相談を受けることが多い私としては、常に頭を痛める問題である。

ところで、通信社時代から身についたクセで、私は**早朝五時のNHKラジオニュース**を聞くことが多い。新聞の情報は、朝刊第一刷であっても、それは印刷の関係で前夜の八時ないし九時、ギリギリでも十二時ぐらいまでのニュースである。これに対し、ラジオのほうは真夜中に通信社、ないし自社特派員からの電報を入れてあることが多い。だから「他人より早く情報を知る」ためには、五時の：ニュースが最もありがたいわけである。

ところが、突然に電話があり、

「××社から五十万円が振り込まれましたので、お知らせします」

と、近くの信用金庫からの報告——。これには驚き、嬉しくて飛びはねたりしたものだ。予期せぬ救済が訪れたのだ。

・・・

その五十万円という本の印税も、まるで送られてこないのに、

<その会社が潰れたのだ>と思い込んでいたわけである。それが幸運にも倒産してなくて、原稿料が送金されてきた次第だ。だからこの一件なども、私にとっては「天から舞い込んだ幸運」と心底から思えたものだった。

ある高度な地位、肩書を得て——かえって寿命を縮め、心身を痛める人が多い。これは「人からどう見られるか……」という意識も原因のひとつ。地位と肩書にふさわしいあり方を考え過ぎ、自縄自縛となってしまうのは、あまりにアホらしいではないか。

一般の店舗商売の場合は必ず、

「よい場所に店が探せなかったら、開業しないことです。とくに今後はこの原則を徹底的に守って頂きたいですね」